OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

香川大学教育実践総合研究（*Bull. Educ. Res. Teach. Develop. Kagawa Univ.*），17:39－50，2008

# 「未来からの留学生」における特別講演の意義
## ―「映画づくりの実践による不登校生への取り組み」を通して―

岡田　知也・七條　正典・岡橋　智栄美・藤範　登志美*
（音楽教育講座）（附属教育実践総合センター）（大学院教育学研究科）（和歌山市立城東中学校）

760-8522　高松市幸町１－１　香川大学教育学部
*640-8331　和歌山市美園町２丁目63番地　和歌山市立城東中学校

# A Significance of the Special Lecture by Guests at "Mirai kara no Ryugakusei" : Through the Lecture "A Practice for a Student Refusing to Attending School by Making a Movie"

Tomoya Okada, Masanori Shichijoh, Chiemi Okahashi and Toshimi Fujinori

*Faculty of Education, Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*
**Joto J.H.S, 2-63, Misono-cho, Wakayama 640-8331*

要　旨　「未来からの留学生 教育学部フェスティバル in 香大」は休日にキャンパスを開放し，講座に参加する幼児・児童・生徒に，大学という「学び」の場において学習や研究活動を体験してもらう行事である。本行事では毎年，特別講演という講座を設け，附属教育実践総合センターとの共催により，外部からゲストを迎え講演会等を実施している。本小論は，平成19年度「未来からの留学生」において実施した特別講演「映画づくりの実践による不登校生への取り組み」について，企画に携わったものがそれぞれの立場から論述し考察を行ったものである。

キーワード　地域貢献　実地教育　道徳教育　不登校　中学校

## 1．はじめに

平成20年３月，学習指導要領が改訂された。そして新しい学習指導要領においても学校週５日制はこれまでと同様に継続されることとなった。学校週５日制の目的は学校，家庭，地域社会の役割を明確にし，それぞれが協力して豊かな社会体験や自然体験等の様々な活動の機会を子ども達に提供することによって，社会全体で「基礎・基本を確実に身に付け，いかに社会が変化しようと，自ら課題を見つけ，自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動し，よりよく問題を解決する資質や能力」，「自らを律しつつ，他人とともに協調し，他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性」，「たくましく生きるための健康や体力など自ら学び，自ら考え，主体的に判断し，行動する能力，自らを律しつつ他人を思いやる豊かな心やたくましい人間性」などの「生きる力」を育むことであった。

平成19年10月に第６回を開催した「未来からの留学生 教育学部フェスティバル in 香大」（以下「未来からの留学生」）は休日にキャンパス

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

を開放し，「未来からの留学生」として講座に参加する幼児・児童・生徒に，大学という「学び」の場において学習や研究活動を体験してもらう行事である。(山神他，2003)

「未来からの留学生」では教育学部の学部生・大学院生や教員の企画による多彩な講座が実施される。第６回においては38の講座が実施された。その中でも特色ある講座の一つであるといえるのが，外部のゲストを迎え講演会等を開く特別講演である。

本小論は平成14年の第１回「未来からの留学生」から，平成19年の第６回まで継続して実施されている特別講演についてその意義をあらためて振り返るとともに，とりわけ今年の特別講演として実施された藤範氏による「映画づくりの実践による不登校生への取り組み」について，教員養成学部における実地教育，小学校教育及び道徳教育の立場から論じ，また同時に実施したアンケート調査から今回の講演を，ひいては特別講演の試みについて検証し，考察を加えようとするものである。

なお本小論における各節の担当は，「１.はじめに」，「２.『未来からの留学生』における特別講演について」及び「６.参加者の声」を岡田，「３.『映画づくりの実践による不登校生への取り組み』について」を藤範，「４.小学校教育の視点から見た本実践の意味」を岡橋，「５.生徒指導・道徳教育の視点から見た本実践の意味」を七條が担当した。

## ２.「未来からの留学生」における特別講演について

### （１）これまでの特別講演

第６回を数える「未来からの留学生」ではこれまで，外部から講師を迎え，以下に列挙したような企画が実施された。

平成14年：香川フルートオーケストラの演奏
平成15年：小柴昌俊氏（ノーベル物理学賞受賞者）「小柴博士からのビデオレター」
平成16年：矢野憲作氏（香川あすなろ協会会長）「温故知新 － スーパーおじいちゃんから生きた歴史を学ぶ」
平成17年：金森俊朗氏（金沢市立西南部小学校教諭）による講演「いのちの授業」
平成18年：アンソニー・ツー氏（Anthony T.Tu コロラド州立大学生化学科教授，生化学者で毒物学の世界的権威）による講演「サリン事件と学校における防災について」
平成19年：藤範氏による講演「映画づくりの実践による不登校生への取り組み」

このうち平成14年の香川フルートオーケストラの演奏は，講演ではなく閉会式における記念イベント的な性格をもった企画といえるため，本小論においては特別講演としては扱わないこととする。そこで他の５回のゲストを顧みると，特別講演のゲストとして迎えたのは研究者２名，学校教員２名，ボランティア活動家１名である。わずか５回の特別講演ではあるが，様々な方を講師として招いていることがわかる。

ところで「未来からの留学生」を教育学部として企画・実施するのは，主に次の３つの理由からである。それは地域貢献，学部生・大学院生の実地教育，大学教員のFDである。特別講演を企画する段階においては，可能な限りこの３つの対象に沿うテーマを模索していくのであるが，その結果，平成19年度の特別講演は，公立中学校教諭である藤範登志美氏による，不登校生徒について「映画づくり」を手がかりとしてクラス全体で問題意識を共有し，取り組んだ実践についての講演をお願いすることとなった。

この実践を特別講演のテーマとして選んだ理由は，まず地域貢献の観点からいうと「未来からの留学生」に参加した子どもの保護者や教員の方に，これまでも重要な課題であり，そして現代の学校においても変わらず重要な課題である不登校について，一人の教員のささやかではあるが献身的な取り組みについて知ってほしいと考えたからである。

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

次に学部生・大学院生の実地教育の観点においては，既成の教員養成カリキュラムにおける最も重要な体験活動は「附属学校・園における教育実習」であることは言うまでもない。しかし筆者は，学部生・大学院生にとって「未来からの留学生」に関わることがかけがえのない財産となるであろうと考えている。第６回「未来からの留学生」に関わった学部生・大学院生を対象としたアンケート調査（岡田他，2008）によると，自律性の高い動機づけに基づいて「未来からの留学生」に参加している学生ほど満足し，次回の企画への参加の意欲も高く，子どもとかかわっていく自信を持ち，成長を実感しており，子どもや教育への関心も高まっていることが明らかとなった。したがって，自律的に「未来からの留学生」に参加している学生ほど，実地教育としての効果があると考えられるのである。「未来からの留学生」に関わっている「子どもや教育への関心も高まっている」学生にとって，いずれ教職に就いた際に有益となるであろうと考えられるテーマにより講演会を企画することは，われわれ教育学部教員の責務であると考えたからである。

最後に大学教員のFDの観点からいうと，例年，多くの教員が「未来からの留学生」の実施に関わっている。その教育学部の教員が子どもの学びを支援するという視点を共有することが重要である，との考えが「未来からの留学生」開催の理由の一つとなっていると山神ら(2003)は述べている。大学教員が専門の研究を活かして，教材開発や教育方法改善へと繋げるためには，子どもたちとの交流が不可欠であると同時に，教育実践の場における学校教員の様々な試みについての知見を得ることも重要なのではないだろうか。それが例え専門外の試みであったとしても，そのことにより子どもたちの「学び」について関心を高め，ひいては教育学部の教員としての力量を形成することになると考えているからである。

以上が「映画づくりの実践による不登校生への取り組み」を第６回「未来からの留学生」における特別講演のテーマに相応しいと考えた理由である。

（２）平成19年度の特別講演

前節において述べたような理由により，第６回「未来からの留学生」における特別講演は，藤範氏による「映画づくりの実践による不登校生への取り組み」と題した講演と実践の中で制作した映画上映であった。平成17年度の第４回「未来からの留学生」における金森氏による講演以来，特別講演は附属教育実践総合センターと共催で行っている。このことにより，講演を実施することが附属教育実践総合センターを通して地域の学校教員にも周知されており，今回も地域の教員の方の参加が見られた。

講演内容は，公立中学校のある学級が，文化祭に出展する映画づくりに取り組む過程において，学級の一人ひとりが不登校生徒と関わり，真剣に考えるようになっていくという，藤範氏自身による実践の内容についてであった。さらに，その時制作した映画「遥かなる時の彼方へ・・・～39人39色」と，別のクラスにおいて同様の取り組みを行った際作成した「No!! bullying」の２作品が併せて上映された。

教員をめざす学部生・大学院生の参加はもとより，前述したように地域の公立学校教員の参加もみられ，全国の多数の学校が直面している不登校の問題についてあらためて考えることができたのではないだろうか。

文部科学省が実施した「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(2007)よれば，これまで減少傾向であった不登校の数が６年ぶりに増加したことが報告されている。不登校問題については依然として深刻な状況にあり，問題を抱える学校においては，その改善に向けての取り組みに苦慮していることが伺えるのである。

講師の藤範氏は，公立中学校の担任したクラスにおける不登校生徒の問題に積極的に取り組んだ。その試みにより，不登校で悩み苦しむ当事者の生徒やその保護者だけでなく，他の生徒達の意識を変え，クラス全体の絆を深めることにもつながっていった過程について報告を行っ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ている。(藤範，2001)

いまやクラスの当たり前の風景となっている，ぽっかりと空いた不登校生の机と椅子。藤範氏の取り組みは，不登校の生徒に真正面から取り組んだクラスと担任教員の貴重な実践といえよう。この実践に基づく講演の内容は，不登校の取り組みに悩まれている多くの先生にとって，大いに参考になるとともに，実践に向けての勇気を与えてくれるものであった。

なお，この実践で藤範氏は，第50回読売教育賞最優秀賞（児童生徒指導部門）を受賞している。

## 3．「映画づくりの実践による不登校生への取り組み」について

中学校の教員として，不登校の生徒のいる学級運営において，いかに不登校をクラス全体の課題とするか，もしくはどうすればできるのかということが，一貫して筆者が考え続けていたことである。この実践以前にも，不登校の生徒が，家庭にいてもできることをいくつか考えて実践をしたが，それらの試みでは，他の生徒たちと心が通じ合うというところまで至ることはなかった。

本実践では，不登校の生徒も含めたクラス全員で文化祭へ参加するために，映画作品を制作することになった。しかし，その全員参加は可能性ということであり，また，不登校の生徒のためにするという意識が，生徒たちの主体的な作品づくりにつながるのかどうか，懸念が全くなかったわけではない。

しかし全ては杞憂であった。台本作りや撮影のスケジュール作成，演技などを通して生徒たちは確実に育っていった。クラスの生徒たちは様々な困難を克服し，筆者の視点から見れば，さながらドキュメンタリー作品を撮っているかのようであった。

紙面の都合により全体を紹介することは差し控えることとするが，本実践の報告（藤範，2001）は実践の時系列に沿って，以下の項目から構成されている。

はじめに
（1）Oさんとの出会い，（2）2年2組の生徒たち，（3）学級目標づくりへの取り組み，（4）Oさんの協力，（5）学校の概況，（6）学年の実態

1．映画づくりの経験
（1）最初の映画づくり，（2）撮影現場の苦労

2．「文化祭の取り組み」の学級会
（1）アンケートの結果，（2）学級会にて，（3）映画づくりの姿勢

3．映画づくり
（1）台本ができあがった，（2）台本の手直し，（3）撮影が始まる，（4）母親と兄の映画撮影参加，（5）日を追うごとに増えてくるスタッフ，（6）Uさんの変化，（7）小学校の卒業アルバムを見て，（8）Kさんの存在，（9）K君とT君，(10) 撮影中のみんなの目線，(11) 進む撮影
(12) 同和推進教員と職員の協力，(13) Oさんからのメール，(14) 最終シーン

4．感想文を読んで
終わりに

この中で，とりわけ本実践において生徒の変容をみることができた場面は，次の2つの場面であった

3－(6)〈Uさんの変化〉

2学期が始まり，1年生から持ち上がった女子生徒で，おとなしく目立つことのない生徒であるUさんの欠席が多くなってきた。

母親からは，家庭での暴力，特に母親に対しての暴力が増えてきたこと，また，泣くばかりで話にならないとの報告を受けた。

学校でも黒板の字をノートに書くことができないことがあった。また，定期テスト中に鉛筆を握りしめたまま解答することができず，握りしめたこぶしから汗が流れ，保健室に駆け込んだことがあった。

ある朝，母親から欠席の連絡が入った時，たまたま授業が空いていたので家庭訪問をした。家の中が散乱していた。何があったかはなんとなく察しがつく。自分の中でコントロールがきかなくなり，母親に対して暴力で訴えるという

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

現象が起きていたのである。

「何か原因？」と聞くと，「別にこれといって理由はないけれど，不安ばかり」という答えが返ってきた。「友達関係もしんどい」という。

「映画の取り組みは苦痛？」と聞くと，「別に苦痛ではないけれど，休んでいるのに，撮影だけ参加するのは気が引ける」という。２回ほど欠席した時に放課後，オープニングの撮影があるから出てきてほしいと電話をして，母親に連れてきてもらったことがある。

「休んでいるのに撮影だけ来て」という心ない言葉が耳にはいったらしい。それくらい，撮影に入る前の２組の生徒は，意識が低く何も考えていなくて，目先のかっこよさだけに捕らわれて映画づくりに取り組む生徒が多かったといえるであろう。

クラスで彼女の友達というのは，学級委員としてテキパキとこなす，元気で明るい女の子Ｎさんである。彼女から見るＮさんとは，自分のできないことをやれる，なんでもやれるスーパーウーマンのような存在だと１年生のときに言っていたことを思い出した。けれど，そのスーパーウーマンはＵさんの中ではとても疲れる存在になってきたのである。

Ｕさんはその複雑な気持ちを私には語ってくれなかったが，その疲れる気持ちも踏まえて一度話をしてみたら？と提案した。Ｕさんはうなずくことも，なんの動作もしなかったが，思い切って２人が話し合える場を設定した。

驚いたことにＮさんは，Ｕさんが学校に登校しないことについてすごく心配して，Ｕさんの姿を見るやいなや泣き始めた。Ｕさんは，Ｎさんが泣くことはないと思っていたのか，（スーパーウーマンと思っていたから）Ｎさんの涙に驚いたようである。

ここは，担任のでる幕ではないと思い，２人の話しあいの時間として，席をはずした。30分ぐらいでもどってみると，２人はにこやかにしゃべっていた。

ここで，どんな話があったのか，尋ねることも必要であったかと考えたが，黙って見守る指導もあってもいいだろうと思い２人を教室に帰した。

そして放課後，Ｕさんたちのシーンの撮影が始まった。彼女はこちらがびっくりするほど，はっきりと台詞を話し，つたない演技ではあるが撮影をしっかりとこなした。

「そんな悩み人に言えたら元気に学校くるって」

この台詞はＵさんの台詞であるが，いつも口元でしか話さなかったＵさんの言葉は，とても大きく聞こえ，自分自身に問い掛けているように思えた。

撮影が回を増すごとにＵさんは自分とＯさんを重ねているように思えた。映画の撮影でこれまでのＵさんとちがう表情をみせたこと（台詞ではなく自分の意見であるかのように話したこと）にクラスのみんなは非常に驚いたようである。

映画の撮影が進んでいくなかで，これまでおとなしく目立たなかったＵさんの存在が，教室の中ではっきりしてきたことが彼女の自信となったようである。

不登校になるかと心配したが，彼女がこの映画で一番自分自身を見つめ直すことができたようである。

３－(10)〈撮影中のみんなの目線〉

何となくやらされている映画制作が，自分たちがやらなければという意識にかわってきたのは，撮影時の生徒の目線でわかる。それは，Ｔ君の投げかけの言葉が出るようになってきてから気づいた。今までは，台詞をいっている生徒の方向を指示しないと，生徒の身体が向かなかったのであるが，Ｏさんの卒業アルバムのシーン撮りから以後は，台詞を自分たちの思いや，一つの意見として聞く姿勢・目線にかわってきたのである。

撮影を開始した頃は，シーンが細切れになっていると，一つのシーンが終わると，次のシーンまでの間に，前のシーンの台詞や内容を忘れてしまうことが幾度となくあった。演技どころではなく，自分の台詞だけで精一杯だったのである。

ところが，ある頃からどんなに間が空いて

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

も，内容や雰囲気を共有し，身体で感じ，頭の中で整理できるようになったのである。映画制作が，単なる映像の記録から，自分たちの気持ちを投影したものと変化していったのである。

不登校の生徒は，結果として学校に来ることはなかったのだが，電子メールを通じて，クラスの生徒にはメッセージを伝えることができた。そして，その時の感動を映像に収めることができたのではないかと思う。

不登校の生徒をクラスでどのように受けとめるのかということは，様々な試みがなされている問題である。筆者の場合は，不登校の生徒を受け入れるといいながら，逆にその生徒にクラスが救われた。

振り返れば不登校を課題とすることは，自分にとって学校という制度とはどういうものなのか，ということを考えることでもあった。この取り組みによって，生徒一人ひとりが明確な答えを得たとまでは言い切れないかも知れないが，何らかの問題意識をもつことができたのではないかと思う。

教育の現場において，善悪や様々な知識を教え，様々な体験を積むことの支援しなければならないのは言うまでもない。しかし時代は，彼らが生きていく勇気を見つけることを求めているように思う。そのためには，様々な手法，メディアが考えられる。筆者の場合は映画づくりであった。

映像という自己実現の手段が，比較的たやすく選ぶことのできる現代，私たち教師主導になりすぎないよう，作業にあまり関わらないやり方も考えられるだろう。しかし協働作業を通じて，生徒と教師が共につくる，共に生きるという方向性を実感できたのも，今回の実践の成果であった。

## 4．小学校教育の視点から見た本実践の意味

文部科学省（2000）は「不登校児童生徒」について，「何らかの心理的，情緒的，身体的あるいは社会的要因・背景により，登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間に30日以上欠席した者のうち，病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義している。

「平成18年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省，2007）によると，平成14年度から微減傾向であった小学校における不登校児童数は，平成18年度4.9％の増加に転じている。さらに，同調査は不登校になったきっかけと考えられる状況についての調査報告を行っている。それによると，最も多いのは家庭生活に起因する「親子関係をめぐる問題」で17.8％，続いて学校生活に起因する「いじめを除く友人関係をめぐる問題」が12.2％，家庭生活に起因する「家庭の生活環境の急激な変化」が9.7％である（複数回答あり，また「その他本人に関わる問題」を除く）。その他には学校生活に起因する「いじめ」「教職員との関係をめぐる問題」「学業の不振」「クラブ活動，部活動等への不適応」「学校のきまり等をめぐる問題」「入学，転編入学，進級時の不適応」，家庭生活に起因する「家庭内の不和」，本人の問題に起因する「病気による欠席」等，不登校となったきっかけと考えられる状況は多岐にわたっている。また４人に１人が複数の状況を不登校になったきっかけとして回答していると考えられることから，不登校となる要因・背景は複合化や多様化の傾向があるといえるのではないだろうか。

さらには，保護者による子どもへの虐待など，登校を困難にするような事例も報告されており，個々の児童生徒が，不登校となる背景にある要因や直接的なきっかけは様々であり，要因や背景は特定できないことも多いことにも留意する必要があろう。

筆者は公立小学校教員である。日々の実践を手がかりとして経験的に最も大切であるのは，児童生徒が不登校とならないために学校及び教員はもとより，地域・家庭等，子どもを取り囲む全体で関わっていくという視点を共有することであると考えている。先述した文部科学省の調査報告においても不登校となったきっかけを

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

「学校生活に起因」「家庭生活に起因」「本人の問題に起因」に分類していることからも，「全体で関わる」ということが，不登校にならないための大切な視点の一つであることは明らかであろう。このことは文部科学省が設置した不登校問題に関する調査研究協力者会議の報告（文部科学省，2003）が「不登校とならないための魅力ある学校づくり」のために挙げた以下の７項目の指針からも見て取ることができる。

①「心の居場所」「絆づくり」の場としての学校

児童生徒が自己の存在感を実感し，精神的な充実感を得られる「心の居場所」，児童生徒が社会性を身に付ける「絆づくりの場」として魅力ある学校を目指す。

②発達段階に応じたきめ細かい配慮

中学校で不登校生徒が大幅に増加することから，特に小学校と中学校との連携を一層推進し，また，体験入学やオリエンテーション等により中学校入学時の不安を解消する。

③安心して通うことができる学校の実現

いじめや暴力行為を許さない学級づくりを行うとともに，問題行動へは毅然と対応する。教職員による体罰等の人権侵害は絶対に行ってはならない。

④学ぶ意欲を育む指導の充実

体験活動等を通して，児童生徒が自らの生き方や将来に対する夢や目的意識について考えるなどのきっかけを与える取り組みや指導を行う。

⑤習熟度別の指導や基礎学力の定着に向けたきめ細かい教科指導の実施

学業不振が不登校のきっかけとなることもある。児童生徒の理解の状況や習熟の程度に応じた「わかる授業」の実施，補充指導の充実などを図る。

⑥学級活動，児童会・生徒会活動，学校行事の特別活動の充実

児童生徒が学校生活の基礎となる人間関係を形成し，また，学校における居場所づくりができるよう，特別活動の充実を図る。

⑦学校と社会のつながりを強めた，開かれた学校づくり

地域の団体・企業・NPO等と連携し，児童生徒が社会との結び付きを強めるような様々な体験活動を実施したり，学校外の多様な人材協力により，児童生徒に多様な学習の機会を提供したりする。

以上の７項目は，いずれも児童生徒が不登校にならないための学校を中心とした，いわば全体で関わるための取り組みの指針である。藤範氏の実践をつぶさにみたところ，不登校生徒Ｏさんへの取り組みとしては，上記の指針①③④⑥に基づく事例を垣間見ることができる。一例を挙げると，学級の取り組みとしてＯさん自身の事例を映画作りの素材としたことで，Ｏさんが自己の存在感を実感したのではないだろうか，またこの時ばかりは，精神的な充実感を得られたかも知れない。これは指針①と関わるといえるであろう。

またＯさんを支援する学級の生徒への取り組みとしては①③④⑥⑦に基づく事例を見て取ることができた。言うまでもなく映画作りを中心とした本実践は，学級活動の充実といえるものである。実践を通して生徒が学校生活の基礎となる人間関係を形成していくことができたといえるのではないだろうか。

藤範氏は，担任したクラスの中での不登校の問題に積極的に取り組み，その改善を図った。その取り組みは，不登校で悩み苦しむ生徒や保護者だけでなく，クラスの他の生徒達の意識を変え，クラス全体の絆を深めることにもつながっていったことは確実であると思われる。

今回筆者は，藤範氏の実践事例を通して，不登校の問題についてあらためて考えることができた。このことは，教員自身が担任するクラスの問題として直面しない限り，自身の問題として引きつけて考えることが難しいということであるともいえる。言い換えれば，筆者を含め教員はともすれば「全体の視点」が欠けていることに気付かない状況に陥る危険があり，そうならないようにしなければならないのである。

藤範氏の実践で制作された映画を鑑賞した際，今までに筆者が出会ってきた不登校児童生

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

徒たちのことが思い出された。筆者が，不登校児童生徒に対して取り組んだ事例については，紙面の都合によりここで詳述することは差し控えることとするが，学校を卒業後，今はどうしているか気になるところである。

## 5．生徒指導・道徳教育の視点から見た本実践の意味

（1）生徒指導の視点から

本実践を生徒指導に視点を置いて見た場合，不登校生にどのように対応するかについて，私事化傾向にある現代社会において，ソーシャルインクルージョン（社会的包み込み）やソーシャルボンド（社会的絆づくり）の視点から対応することが 不登校生の学校復帰を促進する上でたいへん効果的であることが示唆される事例である。また，不登校生だけでなく，その生徒を取り巻く他の生徒にとっても本実践が人間関係を促進する上で有効に働いていることがわかる。

筆者は，これまで本実践を生徒指導に関する授業科目の中で取り扱ってきた。ともすれば不登校についての対応は不登校生やその家族への対応を中心に考えられがちであった。少なくとも，学校への復帰が可能となった時点で，不登校生をいかにスムーズに受け入れられるようにするかが，受け入れ側の担任の重要な役割であった。しかし，本実践では，学校復帰に向けた働きかけの段階から，意図的にクラスの他の生徒を巻き込んで，不登校生との関係性を構築することを通して次第に互いの人間関係を深め，それを生かして再登校を促そうとした斬新な試みである。

また，筆者は，本実践を特別活動における学校行事（学芸的行事）のよい実践例の一つとして，「特別活動論」の中でも紹介している。周知の通り，特別活動はその目的として，「望ましい集団活動」取り上げ，それを通して「個性の伸長」を図ることや，「集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係」を築こうとする自主的，実践的な態度を育てることをあげている。つまり，クラスのみんなで役割分担して，自主的に映画づくりを推進していくことを通して，よりよい人間関係を築き，人間としての生き方についての自覚を深めている本実践は，単に不登校という生徒指導上の問題に対応するだけでなく，特別活動の目標にも充分迫るものである。

このように，本実践は，「不登校」という生徒指導上の問題に対して，単に対処療法的に問題解決に取り組んでいるのではなく，学校教育における特別活動の学芸的行事として，具体的には，文化祭のクラス参加として「映画づくり」を行うという特別活動の実践を通して，問題の解決を図ろうとしたものである。つまり，本実践の一つの意味は，生徒指導上の問題の解決を，きちんと教育活動の一環として位置づけ行われているところにあると考える。教師の働きかけが，不登校生やその保護者だけに止まるならば，それは個別対応としての教育作用でしかないが，このように他の生徒を巻き込み，しかも生徒だけでなく，そこで展開される活動や教師の働きかけ（指導）は，クラスの全生徒を対象としたものとなっている。

本実践のように不登校への対応については，第一に本人への支援としての心のケアや本人が抱える問題の除去が重要であり，そのことの対応が優先される。しかし，支えるだけでは，一時的な緩和や解決は図られたとしても継続しない場合が多い。本人の内面が強化されていなければ，本人に対してあるいは本人がそう感じてしまうような何らかのマイナスの作用が働いた場合，また同じ状況に陥ってしまうことも考えられる。

したがって，第二としては，支えるだけでなく，本人の社会的自立を促すような，教育作用が必要となる。本実践では，クラスの成員からの家庭訪問やメールでの呼びかけ・クラスの状況や活動のお知らせなどあくまで級友からの支援の形で進んでいる。当然本人は，周りからの働きかけに戸惑いながらも，級友の根気強い継続的な働きかけによって，次第に自分のことを心配している級友の存在に対して意識し，自己

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

存在感を確かめるとともに，クラスの一員としての自覚も少しずつではあるが，持ち始めたのではなかろうか。それに加え，それらの働きかけは，それを受け止める側である不登校生自身の内面にまで届き，内面を揺さぶり，最終的には，本人自身の力でクラスの友達に対してメールを送信するという，社会的自立に向けて内面が少しずつ強化されていく姿として具体化されたことからもわかるように，本人の社会的自立を促す教育作用として機能したものであると言えよう。

第三は，不登校生を取り巻く環境への働きかけである。特に本人を取り巻く家族への支援（精神的なケアや，閉塞状況を打開する具体的な方向性が少しでも見えるような働きかけなど）がなされることによって，家族の動きや表情にも変化が見られるようになる。そして，そのことが本人に対する接し方にも表れ，本人の状況にプラスの作用を与えることにもなる。本実践では，友人が継続して学校の帰りに立ち寄り，本人に会えなくても，家族（母親）と話，連絡を伝えるという活動を行ったり，本人を主人公とした映画づくりの中に，家族（母親，兄，猫）やアルバム（本人の写真が掲載されている）を，本人の了解の下，登場させることによって，間接的に本人が出演するような働きかけが行われたりしている。このことは，家族にとっても級友が本人に絶えず働きかけてくれている（不登校状況であったとしても級友との絆が具体的に見えること）という事実として，家族の中の閉塞状況を少しでもプラスの方向に拓く作用を与えているものと考える。

以上述べてきたことは，冒頭でも述べたように，これからの不登校生への対応に関して，ソーシャルインクルージョン(社会的包み込み)やソーシャルボンド（社会的絆づくり）の視点をもって対応することの有効性について，具体的に検証したものである。その点において，本実践は，これからの生徒指導上の問題の解決に関して有益な示唆を与えるものである。

（2）道徳教育の視点から

次に，広く道徳教育の視点から，本実践の意味を以下検討してみたい。

本実践を道徳教育の視点から見ようとした場合，次の二つの視点が考えられる。まず一つは，道徳教育の内容からどう見るかであり，もう一つは，指導の領域としてどう見るかである。

①道徳教育の内容から見た場合

道徳教育の内容から本実践を分析した場合，どのような内容として分析できるのであろうか。

まず，第一に，「友達と協力して映画づくりをすること」や「友達への気遣い」，または次第に「クラスの仲間としての意識」がはぐくまれていくことから，「信頼友情」の視点から分析することができよう。

第二は，不登校という状況の中で悩みや課題を抱え困っている友達を助けるという点からは，「思いやり，親切」の視点が出てこよう。

第三は，家族が，不登校生に対して心配し，様々な面から支えていこうとするところに「家族愛」の視点が考えられる。

第四は，クラス全体として行事に取り組み，その中から学級集団としての結束やクラスに対する愛情や誇りが芽生えてきていることから，「愛校心」の視点が考えられる。

しかし，これらの内容について，果たして生徒はどう学ぶことができるであろうか。これらの実践全体を見れば，先に見た四つ（信頼・友情，思いやり・親切，家族愛，愛校心）の道徳教育の視点から学ぶことができると考えられるが，たとえば，不登校生とその家族とのかかわりやそこから見えてくる家族の不登校生を思う心や愛情の深さについては，映画の場面を見ること以外には，クラスの他の生徒にとって受け止める場面はない。仮に映画の中でその場面を見たところで，必ずしも「家族愛」についてどの子もが考えるとは限らない。したがって，本実践が，先に示した四つの内容を学び得る実践であったとしても，この実践を道徳教育の視点から生徒とどのように向き合わせるかによっ

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

て，学ぶ内容は変わってくることになる。広く道徳教育として考えた場合は，生徒一人ひとりが，学ぶ対象であるこの実践から，自らの関心に即してこの四つの内容から学びを深めていければよいのであるが，折角の貴重な体験からしっかりと学び深めていけるためには，この実践が，映画づくりとその発表で終わらずに，発表後に，しっかりと各自の学びを交流し，自らの学びを振り替えれるような場を設定する必要があろう。そのことによって，初めて，自らの関心による内容だけでなく，ここで示した四つの内容に関して，幅広い視点から学びを深めることができると考える。

②道徳教育の指導領域の視点から見た場合

本実践は，指導領域の視点から見れば，これだけでは，やはり，特別活動における実践であり，文化祭という学校行事に向け，クラスで計画し，実践しているという学級活動と見ることができよう。それに関連して，放課後に各自が自主的に不登校生の家を訪問したり，小学校時代のアルバムを探して持ってきたりするなど，学校外における活動もみられる。しかし，いずれにしても，全体として，特別活動を中心としたものであり，その活動内容は，学級活動及び学校行事（文化的行事）としてとらえることができる。

当然，道徳教育は，学校教育全体を通じて行うものであるから，特別活動として実践された本実践も，先に示した内容に関して学ぶことのできる道徳教育の場としてとらえることができる。ただ，①でも述べたように，本実践のように貴重な体験を生かした道徳教育を行うとするならば，つまり，本実践に含まれる道徳の内容が，このクラスの成員にしっかりと学べるようにと考えるならば，四つの内容のいずれかに中心をおいた道徳の時間を設定し，本実践との関連を図りながら，より一層深まりのある学習が可能となるような学びの場を設定することが考えられる。

今回の学習指導要領の改訂においても，道徳教育の中で，特に体験を生かした指導の工夫が求められている。ぜひ，体験「活動」に止まらず，体験「学習」となるためにも，振り返りの場（学級活動）の設定や，道徳的な視点から学びを深める道徳の時間との関連を図った指導の場の設定などの工夫により，個の学びを広げ，深めることを期待したい。

## 6．参加者の声

講演終了後，アンケート調査を実施した。19名から回答が寄せられ，回答の集計は以下の通りとなった。

1．公開講演会について

A：大変満足 9名　B：満足 7名　C：普通 3名　D：やや不満 0名　E：大変不満 0名

2．会場について

A：大変満足 8名　B：満足 7名　C：普通 3名　D：やや不満 1名　E：大変不満 0名

3．日時について

A：大変満足 5名　B：満足 6名　C：普通 8名　D：やや不満 0名　E：大変不満 0名

この結果から，今回の講演テーマについての選択が適当であったということができる。寄せられた次の記述からもそのことが伺える。

・冷めていた生徒，Oさんのかわりゆく様子がよくわかりました。本当に，上辺だけでなく生徒は変わることができるのだと思いました。
・学校に勤務していて，不登校生徒へのかかわり，教室での空白の席を他の生徒たちにどう伝えていくか課題でした。
・実践された経験を先生本人からお聞きすることができ，また先に映画を観せていただいたので，話されたことが全てイメージでき自分がその場にいるような気さえしました。本当に感激しました。
・どうしてここまでOさんがああなってしまったか？原因を探すより現在を受け止めそこか

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

ら考えるというのは分かりますが，小学校時代に何とかできたのではないか，どんなことならできるのか，小学校の先生との研修はされたのかどうか，このあたりが知りたい。「解決ではなく問題意識をもってくれたことがよかった」と言われ納得しました。
・いじめ問題は未だになくなっていないし，解決方法も難しいと思うけど，映画をクラスで作成することでクラスがまとまっていったことがすごいと思った。解決法はないわけではないと思った。
・貴重な意見を聞けたから。これからの自分の役に立つ。

加えて，設問4，設問５の自由記述には次のような回答が寄せられた。

４．今後，センター公開講演会で実施してほしいテーマについて，ご意見をお聞かせください。
・中学校での実践はよかったと思います。なかなか難しい。困難な状況にある学校現場で一生懸命とりくんでいる実践が聞ければと思います。
・食育の大切さ
・今後もこのような実践的で実りある会があるとよいと思います。
・今後もこうした優秀教員の実践例のお話を担任の先生からお聞きしたいです。
・小学校の先生の学級経営の取り組みについてお聞きしたい。低・中・高学年と県内で３名くらいお聞きできればありがたい。
・不登校生徒へのソーシャルワークなど

５．その他　ご意見，ご感想等ご自由にお書き下さい。
・教育に関わっていく者として本当に冷めてしまった子どもは冷めたまま先生のからまわりになってしまうのではないか…と思うこともありました。しかし，実践はすごかったです。ありがとうございました。
・本日のすばらしい講演ありがとうございました。つながるということを忘れずにこれからも取り組みたいと思います。
・現在社会的に問題となっている「いじめ」や「不登校」について改めて深刻だなと痛感した。また教育への感心が高まった。
・ありがとうございました。いじめ問題も考えさせられました。
・高校生が参加して下さったことがとても嬉しかったです。午前の講座にも参加しており，ぜひ本校に入学してほしいと思いました。映画２本ともとても感動しました。ありがとうございました。藤範先生の生徒さんたちがとてもうらやましいです。
・せっかくよいお話をお聞きできるのに，なんとかPRできないものか，残念ですね。県内の団体（校長会，園長会）を通じてできませんか？
・私の子供は高１になりますが，友達は小２の10月頃から不登校になり，小６の修学旅行の時には参加はできましたが，中学校３年間は一度も出席できなかった。その学年に当たった先生方は色々ご苦労され家庭の方も行かれたり学校内で会議をされたりと大変でした。
・先生の目を盗んで１人の子を集団でいじめることで不登校は増えると思った。
・教師や生徒たちの思いがつまった映画でした。感動しました。ありがとうございました。

本アンケート調査には27の自由記述が寄せられた。そのうち講演の内容に関わる記述と考えられるものは17あり，その全てが内容について肯定的な記述であった。

講演の運営に関わる記述と考えられるものは11あり，その記述には今後の課題として検討しなければならない内容が含まれている。具体的には以下の記述である。
・こんなにすばらしい講演はぜひ学生さんに聞いてほしいと思います。午後の講座の時間と重なっているので学生さんが聞くことができる時間がいいと思いました。
・せっかくよいお話をお聞きできるのに，なん

OLIVE 香川大学学術情報リポジトリ

とかPRできないものか，残念ですね。県内の団体（校長会，園長会）を通じてできませんか？

・教室が明るすぎたので黒幕がはれる教室にした方がよかったのでは？

これらの記述から，特別講演の今後の課題として以下の点を挙げておきたい。

1）「未来からの留学生」の講座の時間割を再考し，講座を運営している学部生・大学院生・教員も参加が可能な時間帯に実施する。

2）地域貢献も特別講演開催理由の一つであることから，広報活動について可能性を模索し，様々なネットワークを通じて広く情報を伝え，参加者の増加に結びつけなければならない。

「未来からの留学生」の様々な講座の中で，とりわけ特別講演は，附属教育実践総合センターと実施委員会が共同で企画・運営を行うものであることから，連携を緊密に行うことが重要であることは言うまでもない。

## 引用文献

文部科学省（2000）『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』

藤範登志美（2001）「映画づくりの実践による不登校生への取り組み」『読売教育賞受賞者論文集』読売新聞社，p121－136

文部科学省（2003）『不登校への対応について』

文部科学省（2005）『生徒指導上の諸問題の現状について』

山神眞一・野﨑武司・岡田知也・小方朋子（2003）「教育学部FDと学生の実地指導を企図した学部－附属連携事業の試み－〝未来からの留学生〟一日体験入学を通して－」『教育実践総合研究第６号』香川大学教育学部，p.25

文部科学省（2007）『平成18年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』

岡田知也，野﨑武司他（2008）「実地教育の側面からみた『未来からの留学生』の意義－参加の動機づけに関する学生の意識調査から－」『教育実践総合研究第16号』香川大学教育学部，p.25